九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マドレーヌの「風味」：『失われた時を求めて』における想起の語り

中野, 知律
一橋大学大学院社会学研究科 : 特任教授

https://doi.org/10.15017/6632426

出版情報：Stella. 41, pp.191-222, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l’Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：

マドレーヌの「風味」
――『失われた時を求めて』における想起の語り――

中　野　知　律

『失われた時を求めて』[1] に現れる無意志的想起の代表例，「お茶に浸されたマドレーヌ」をめぐる想起の語りの構成がきわめて複雑であることに注目した読みは多くはなかったように思われる。「無意識（レミニサンス）の想起がその《原因》と見做される同一の感覚によって始まったと断言するのは事後的な分析作業にほかならない」と述べて，語り手の体験における「無意志的想起のプロセス」を追おうとしたジェラール・ジュネットの読解はそうした試みのひとつと言えるだろう。「その想起体験は，実際には，感覚の同一性の把握によってではなく，《原因の概念なく》現れる《歓喜》や《至福》によって始まるのであり」，「その歓喜がしばらく続いたあと，ついにその源＝感覚（la sensation-source）が同定される瞬間に至って初めて」，無意志的記憶による「類比の奇跡」（IV, 450）は発現している，と指摘するのである[2]。

興味深いのは，この「想起」現象の語りを厳密に辿ろうとする批評家が，マドレーヌ挿話（想起する / される場面として対をなすテクスト，I, 44-47 と I, 50-51 を合わせてこう呼ぼう）において，「同一の感覚」と見做されているものに秘かに仕組まれた微妙なずらし――無意志的記憶が結びつけたふたつの時空間における「感覚」の語り方の差異に着目していないことである[3]。

本稿ではマドレーヌ挿話の内的照応とその蝶番をなす「感覚」についてささやかな考察を試みる。2018 年に死を迎えるまでベルナール・ド・ファロワが邸に秘匿していたプルーストの原稿群（「ファロワ保管文書 Archives Fallois」，以下「F 文書」と略す）のなかから，マドレーヌ挿話の最も古いかたちと現時点で考えうるテクストが発見され，2021 年春にそれを含む校訂版が刊行されたことが小論の背景にあるわけだが[4]，それを踏まえて新たな角度からこの挿話の生成過程を辿ってみることで，関連モチーフを扱ったこれまでの拙考を再検

証することにもなるだろう[5]。

まずは，感覚と想起の関係について昨今話題の「プルースト現象」に触れておきたい。

I.「ある共通感覚」[6] の複数性

「プルースト現象」――マドレーヌの「匂い」？

> 匂い手がかりによる自伝的記憶の想起現象は，一般的に，プルースト現象（Proust phenomenon）として知られている。プルースト現象とはある匂いとの遭遇を契機に，突如としてその匂いと結びついた過去の出来事があたかもそれを追体験しているかのようにありありと思い出される現象を示す。この現象は，作家プルーストによる“失われた時を求めて”（Proust, 1913）のなかで極めて象徴的に述べられたことから，プルースト現象と呼ばれるようになった。

この明快な定義とともに,「嗅覚と記憶についての認知心理学研究」の昨今の発展を踏まえて「プルースト現象が単なる小説の一節ではなく，実際にも生起しうる現象であるかどうか」を考察した山本晃輔の論考「嗅覚と自伝的記憶に関する研究の展望」(2015 年)[7] は，文学研究者に貴重な示唆を与えてくれる。というのも，言葉の上に言葉を重ねていく「文学」の対象は言語空間であり，言葉の彼方で（あるいは手前で）生身の人間に起きていたであろう現象について，責任をもって語る術をもたないからである――だからこそ言語化された虚構すなわち「小説」に普遍性が宿るのだとプルーストは考えていたわけだが (I, 84)。ならば,「文学」そしてプルースト研究からは，この挿話で語られている感覚と想起についてどのような読みを提示できるだろうか。

上記論文の結びで著者は,「プルースト現象の元になった紅茶に浸したマドレーヌの匂いによる想起を描いた場面では，厳密には匂いだけでなく味や温度等の複数の感覚が記憶を想起させる手がかりであったと考えられている」[8] として，プルーストにおける「共感覚」を論じた原田武の著書も視野に入れながら[9]，感覚知覚心理学が近年注目する「多感覚相互作用」の影響の観点から検討をすすめていく意義と実証の可能性を述べている。この繊細な論究との接点となるマドレーヌ挿話と「匂い」の問題を，私たちはプルーストのテクストとのみ向き合う立場から取り上げよう。

マドレーヌ挿話において「匂いが引き金となっている」[10] という見解は，長

らくプルースト研究のなかでは共有されてこなかった。最近は「プルースト現象」に触発されてか,「マドレーヌの香り」[11] という表現を使うプルースト研究者も出てきたが，前世紀末までの研究書・論文では「マドレーヌの味」としての言及が圧倒的である。

「匂い（odeur）」という語はマドレーヌを「私」が口にする場面（I, 44-47）では１回だけ，ただし同様の想起の特徴を定式化するきわめて重要な文章（フレーズ）のなかで,「マドレーヌ」という語とは直接結びつけられずに現れている（I, 46）。しかしながら，語り手が体験の始まりにおいて「力強い喜びに結びついたものとして感じていた」のは「お茶と菓子の味」であり,「突然，思い出が現れた」ときに気づくのも，その「味（goût）」がかつての「お茶か菩提樹の煎じ茶に浸されたマドレーヌのかけらの味（goût）」であったことなのである。マドレーヌ挿話全体，すなわち想起する / される場面の全体において，動詞形を含んで５回繰り返される «goût» の方を研究者が取り上げてきたのは，小説内でこの挿話に言及がある場合，とりわけ最終篇『見出された時』で，遂に解明された芸術創造と特権的な想起の瞬間の関係が論じられるときにその鍵となる「あのマドレーヌの味（le goût de la madeleine）」という表現が繰り返し用いられているからでもある[12]。

また，小説の外部，プルーストが小説第１篇の刊行前夜に『ル・タン』紙に自作を紹介した際[13],「無意志的記憶（la mémoire involontaire）」の働きの例として,「この小説の第１巻で,「私」と言って語る人物（それはこの私ではありませんが），彼が，マドレーヌの欠片を浸したお茶の一口の味のなかに（dans le **goût** d'une gorgée de thé où il a trempé un morceau de madeleine），忘れられていた歳月や〔場処や〕人々を突然，見出すのをみなさんは御覧になるでしょう」と述べていることも考慮されてきたと言えよう。

そうした語りの自己言及において嗅覚に特化した例がない一方で，では，マドレーヌ挿話のなかで唯一 «l'odeur» の語が現れている文章をどう考えるべきだろうか。

「味」-「風味」-「匂い」

現在と過去を「無意志的に」重ね合わせる「共通感覚」としては,「視覚」のように「知性の記憶」を支える感覚に，味覚・嗅覚・触覚・身体感覚などの「さ

さやかな感覚」を対置するという構図を，プルーストは「サント＝ブーヴに逆らって」構想以来繰り返し語っているので[14]，「味」も「匂い」も同じ方にあるわけだが，しかし言葉のレベルで，畳み掛けられている「味」の記述のなかに「匂い」の語がふと紛れ込んでくるのはなにゆえか。

プルースト研究者の関心を長らく引くことがなかったこの点を巡って，マドレーヌ挿話の生成過程をあらためて検討してみると，「味」と「匂い」の間で語りの重心移動が起こっていたこと，しかも想起に関わるモチーフが挿話の前半と後半と配分されてきたことに気づかされるのである。その検討にあたり，まずはこの挿話の決定稿における «l'odeur» という語の現れかたに注目してみよう。

「私」の特権的な体験は「マドレーヌを浸して柔らかくしておいたお茶のひと匙を口に運ぶ」行為（単純過去）で始まっている。「二匙目を飲む」ところからは物語体現在での語りが続き，「突然，思い出が現れた」（複合過去）後の回想のなかに，超時的現在と見做しうる相で割り込んでいるのが以下の一文である――

> 「古い過去から何も残存せず，人々が死んだ後，事物が崩壊した後にも，唯一，はるかに脆いけれども命の根が深く，非物質的でありながらより執拗で忠実なものとして，匂いと風味（l'**odeur** et la **saveur**）はさらに長い間とどまり，魂と同じく，他のすべてのものの廃墟の上で，思い出し，待ち受け，期待し続けて，ほとんど触知しえないほどのその滴の上に，撓めることなく支え続けるのだ，回想の巨大な建造物を」（I, 46）

「匂い」と「風味」の２語は，『ル・タン』紙掲載の自作紹介文においても，過去の十全な想起をもたらす感覚として並べて挙げられていたのだった――

> 「私の作品は無意志的記憶と意志的記憶の区別に貫かれています。〔…〕目と知性の記憶である意志的記憶は，過去（passé）にかんして真実を欠いた面しか与えてくれないのに対して，まったく異なった状況のもとで見出された匂い，風味（une **odeur**, une **saveur** retrouvées）が思いがけず過去を十全な形で呼び覚まして（réveiller）くれるのです」（*Essais*, 1170）

goût とではなく odeur と並べられた saveur の意味の射程を作家はどのように考えていたのだろう。

«saveur» は，日本語の「風味」[15] と同じく，「味」に関わることを前提に「匂い」をも含むものであることが辞書的に確認できる。「味覚の器官によって感知

される性質。同義語 goût。類推により odeur, parfum」(『フランス語宝典』[16])という理解である。それは『百科全書』の解説とも呼応するもので,「saveur とは,味覚の器官に印象〔生理的反応〕を与える物体の液,その印象であり」,また「嗅覚(odorat)は個別の感覚であるよりも,味(goût)の感覚(sens)であって〔…〕匂いの味わい(le goût des odeurs)であると同時に風味の予兆=前味(l'avant-goût des saveurs)でもある」ことから,「芳香性のある(odoriférants)物体と風味のある(savoureux)物体の間,味覚(goût)と嗅覚(odeur)の対象の間には親和性が見出される」[17]。

ちなみに19世紀の美食言説を主導したブリヤ=サヴァランも,『百科全書』の定義をなぞるかのように,『味覚の生理学』(1826)の「瞑想II 味覚について,§10 嗅覚の味覚への影響」においてこう語っていた――「嗅覚(l'odorat)の参加無くしては完全にものを味わうこと(dégustation complète)はできないと確信するし,嗅覚と味覚はひとつの感覚を作っている(l'odorat et le goût ne forment qu'un seul sens)と信じたくなる。〔…〕風味のある物体はすべて(tout corps sapide)必ず香りがあり(odorant),嗅覚の帝国(l'empire de l'odorat)にも味覚の帝国(l'empire du goût)にも入れられるものだ」[18]。

さて,マドレーヌ挿話内の «l'odeur et la saveur»(I, 46)という表現では,odeur と goût を兼ね得るはずの saveur が odeur と並んで,つまり odeur を自らの外に括り出して現れている。ということは,残る goût の方に意味の軸足を置いたものとして saveur の語が使われているのだろうか。実際,紅茶に浸したマドレーヌを口にする場面で,上記の例以外に3回現れる saveur のうち,ひとつは goût の言い換えである――

I, 45 : « la **saveur** encore récente de cette première gorgée »
I, 44 : « Je sentais qu'elle [= cette puissante joie] était liée au **goût** du thé et du gâteau, […] Je bois une seconde gorgée où je ne trouve rien de plus que dans la première »

他の2例は「マドレーヌ」と直接結びつけられていない――

I, 45 : « Certes, ce qui palpite ainsi au fond de moi, ce doit être l'image, le souvenir visuel, qui lié à cette **saveur**, tente de la suivre jusqu'à moi. »
I, 46 : « je ne peux […] lui au souvenir visuel] demander de me traduire le

témoignage de sa contemporaine, de son inséparable compagne, la **saveur**, lui demander de m'apprendre de quelle circonstance particulière, de quelle époque du passé il s'agit.»

一方,『見出された時』のなかのマドレーヌ挿話への回顧的な自己言及は,すでに見たとおり「マドレーヌの味」としてが殆どではあるが,そこに混じって3度現れる saveur の例は,清書カイエにおいて goût を修正したもの,あるいは goûter という動詞とともに用いられているもの,余白の加筆箇所に見られるものなのである――

Cahier XVIII, 108r°:
«~~le~~<a> ~~goût~~ <**saveur**> d'une madeleine trempée dans une infusion» (IV, 445)

同じ108r° の2箇所では マドレーヌに対して «goûter» の語が維持されているが («au moment où je goûtais la madeleine»; «le jour où j'avais goûté d'une madeleine trempée dans une infusion» [IV, 445]), 109r° で «quand je goûtais la **saveur** de la madeleine» と修正無しに書かれているのは108r° から続く断章のなかであるためか。

Cahier XIX, 14r° marge :
«le passé dans la **saveur** d'une madeleine» (IV, 473)

慎重に,あるいは遅ればせに登場する「風味」。

«goût», «odeur» そして両者を仲介し統合しうる «saveur» という語はそれぞれマドレーヌをめぐる語りをどのように支えてきたのだろう。想起の起点となる感覚とそれをもたらす媒体の記述に着目して,この挿話の形成を考えていきたい。

Ⅱ. 想起のモチーフ再考

マドレーヌ挿話の前半部 (I, 44-47) ――「お茶に浸したマドレーヌ」を「私」が味わうことで想起が発動した体験を語るこの部分を,研究者の慣習に倣って《マドレーヌ体験》のテクストと呼ぼう――の生成過程は,吉田城が「サント=ブーヴに逆らって」の序文構想以降の4段階の先行テクストを辿りながら明らかにしている[19)]。私たちはさらに「F 文書」のなかから見出されたテクストと

ボドメル校正刷の段階を加えて[20]，想起のモチーフを再検討することにしよう。

1. - «Autre manuscrit n° IV»

「F文書」には，「75枚の紙片」とファロワが呼んでいた原稿群（校訂したナタリー・モーリヤックによれば，1908年の初めから秋にかけて執筆されたもので，1907年の終わりには準備されていた可能性もある）[21] のほか，それに先行するあるいはその執筆に使われた未発表原稿も含まれている。そのひとつ，校訂者により «Autre manuscrit n° IV» として分類された短い自筆原稿（以下「原稿IV」と呼ぶ）が，マドレーヌ挿話の新たな先行テクストと考えられるものである[22]。

この断章は，1907年秋にプルーストが使っていたのと同じ紙に書かれており，また Carnet 1, 7v° に記された «Pages écrites» のリストに挙げられているものと同時期（1908年4月末-7月）の，あるいは「75枚の紙片」の構想に属するテクストとして1908年秋までに執筆されたものと見做されている[23]。

この見解を踏まえるならば，無意志的記憶がはたらく特権的な瞬間の例として最も早く構想されたのではないかとこれまで考えられてきた「サン＝マルコの洗礼堂の不揃いの敷石」のモチーフ（Carnet 1, 10v°. 1908年10-11月）[24] の先行性には留保をつけるべきかもしれない。というのも，ヴェネチアにかんするテクストは「75枚の紙片」にも含まれているのだが[25]，そこでは，コンブレーの散歩を思わせる「幼年期」の散歩の思い出とヴェネチアの水路の散歩との照応（83r°），「感覚による知覚，現在時の専制，知性の介入，活動の網利己的な欲望の連鎖などが生きることを妨げている私たちの生の瞬間が，やがてついに訪れる復活（résurrection）の日の栄光に輝く」ことの予感が書き留められてはいるものの（83v°），その場で無意志的想起は発動していないからである。また，「ラスキンの書物を手にしてサン＝マルコ寺院に到着する」場面はあるが，洗礼堂の敷石への言及はない（85 v°）。

つまり「原稿IV」は，『失われた時を求めて』の特権的瞬間に繋がる最初の例とされていた「サン＝マルコ洗礼堂の不揃いの敷石」のメモに先立ち，かつ従来マドレーヌ挿話の原型とみなされてきたテクスト（«Proust 45», 1r°-2r°, 1908年11-12月もしくは1909年初）よりも早い段階のヴェルシオンということになる。それをナタリー・モーリヤックの校訂版に拠って訳しておくと——

「ブルターニュの伝説には，人が死ぬとその魂は，飼っていた犬や~~釣鐘~~（カリヨン）や家の戸口の敷石や腕輪などのなかに移り，もし昔の生涯で見知った誰かに再び会わなければ，いつまでもそのままになる，という言い伝えがある。しかし，もし死者の魂が彼らを知っている誰かに巡り会えば，すぐに魂はかつての姿形を取り戻すのである。来世についてのあらゆる信仰のなかで，これは私が最も苦もなく信じられそうなものに思われる。〔この段落全体が削除されている〕

ブルターニュには死者の魂が親しい事物のなかに移り，その人をかつて知っていた誰かと出会い，解放される日までは，そこに~~繋がれて~~＜囚われて＞留まっている，というような伝説が多くあるのだが，そうした伝説のひとつを読むとしばしば私はそれこそが苦もなく信じられそうな信仰であると感じることがあった。それは，私の人生において大きな意味を持ったものが~~私にとって~~死に絶え，あるいは少なくとも私がそれを死んだものと思うたびに，そうした事物は実際にはごく小さな物のなかに移り，もし私がそうした小さな物に出会わなければ，実のところ~~そこに~~死んだまま留まっていたからである。私は知性によってそれらを喚起しようと努めたものだったが，それに至ることはできなかったのだ[26]。ああ，と私は自分に言うのだった，私の過去のそうした部分は死んでいるのだと。どのようにして私は知り得ただろう，あの幾つもの夏のすべてが，私がそれらの夏を過ごした庭，そこで味わった悲しみ，そこで見上げた空，そして私の家族の生活の全体，そうしたすべてが~~ひと匙~~＜小さなカップ＞一杯のお茶，硬くなったパンが浸されている~~熱い~~煮立ったお茶のなかに移っていたということを。もし私が，その煮立ったお茶に出会わなかったならば――しかもそれは十分にあり得たことなのだった，というのも私はお茶を取る習慣がなかったから――，あの年，あの庭，あの悲しみは，私にとって甦る（ressuscit[er]）ことはなかったろう。だが，何日か前のこと，~~寒い~~凍りつく天候の日だったせいで，私が凍えて帰ってきて，それから〔中断〕」

（*75 feuillets*, pp. 128-129）

後に「第１巻の題名」の案として「一杯のお茶のなかの庭」を挙げてみることになる作家の思い[27]の原点を垣間見させる文章である。実際，想起の起動装置として強調されているのは，「お茶」に浸される物以上に，「お茶」そのものなのだ。「硬くなったパン」が「お茶」のなかで潤びる姿のうちに，未来のマドレーヌ挿話が予告されていることはもちろんだが，« thé » についての形容がまったくない決定稿に比べると違いは明らかだろう。

「~~ひと匙~~＜小さなカップ＞一杯の~~熱い~~煮立ったお茶（une ~~cuillerée~~ <petite tasse> de thé ~~chaud où une~~ bouillant）」，その「煮立ったお茶のカップ（la tasse de thé bouillant）」のなかに「移っていた（passé）」過去とは，「幾つも

の夏のすべて（tous ces étés-là）」（複数）であるが，実際に想起されるのは「あの年（cette année-là）」（単数）のことに絞られている。問題となる感覚の種類はお茶の「熱さ」以外に明示されておらず，回想する場面で「私」が口にするのと同一物が回想される場面でも摂取されていたのか確証がないまま原稿は中断されているが，過去の「甦り」が解凍のイメージで語られようとしていることは理解できる。「~~寒い~~凍りつく天候の日」（決定稿でも「ある冬の日」[I, 44]）にとる「~~熱い~~煮立ったお茶」が「凍えた」身体に沁み渡り，回想する日の寒さと回想される「夏」の暑さという対比的な語りが印刷稿以上に強調されているのが感じられるのである。

「お茶の匂い」

「75 枚の紙片」のうち校訂者によって «Une soirée à la campagne» と題されたテクスト（*75 feuillets*, pp. 23-49, ff^{os} 1-26）には，「原稿 IV」の想起体験との呼応を示唆する一節がある。

後のコンブレーを思わせる田舎家での夕べに「私」が体験する就寝の「ドラマ」（f° 11 : «un drame» ; «ce théâtre de mon supplice de chaque soir»）において，来客のためにおやすみのキスをしに来てくれない母を寝室で待つ「苦悩」が，「その新しい部屋（私たち家族は数日前に到着したばかりだった）cette chambre nouvelle（nous n'étions arrivés que depuis quelques jours）」（f° 13）の馴染みのない雰囲気に託して語られる。その部屋の「敵意に満ちた」調度として挙げられている「振り子時計の形，そのチクタクの騒音」「カーテンの赤い色」や「ヴェチヴェールの匂い（l'odeur de vétiver）」は，小説ではバルベックで初めて過ごすホテルの部屋の要素となるものである。この田舎家の「部屋」と対比されるのが，慣れ親しんだ「パリの私の部屋」（f° 12, f° 13）なのだが，その場に結びついて想起されるものとして「お茶の匂い」が挙げられているのである――

「ヴェチヴェールの匂いには苦悩の意味などないと私は懸命に考えようとしていた，そして，冬にパリの私の部屋で淹れるお茶の匂い（l'**odeur** du thé que je faisais dans ma chambre de Paris l'hiver）を考えようと努めるのだった」（f° 13r° ; *75 feuillets*, p. 37）

冬にパリでお茶を飲むことは，この文章では過去の習慣として語られており（直説法半過去），「原稿 IV」および決定稿『スワン家の方へ』で「習慣に反して」お茶を淹れてもらう（« quand un jour d'hiver［…］ma mère, voyant que j'avais froid, me proposa de me faire prendre, contre mon habitude, un peu de thé »）状況とは対照を成す。

一方，室内の「匂い」と精神状態の関連は，この一文に先立つ箇所でも繰り返されているし（母と引き離される「悲しみ」に結びついた「階段のニスの匂い（l'odeur de vernis de l'escalier）」［11 r°］），母といられる「甘美な」時間を約束してくれる「台所からの料理の美味しい匂い（une bonne odeur de cuisine）」（11 r°），『失われた時を求めて』においても「レオニー叔母の部屋」（I, 48-50）や「アドルフ叔父の書斎」（I, 71）など，部屋の匂いのテーマ系は後の小説まで持ち越されることになるだろう。

「部屋」と結びついた「お茶の匂い」。そもそも部屋の「匂い」の回想は，『ジャン・サントゥイユ』ですでに無意志的想起の原理を解説する挿話のなかに組み込まれていた[28]。ジェネーヴ湖を前にして海が想起される語りの延長上に，同種の体験として，「家に入ったときに感じる匂い（odeur）」が「かつて住んでいた海辺の家の匂い（l'odeur de certaine maison que nous habitions au bord de la mer）」であることを「認識」させ，「この匂いが私の生活のすべてを包んでいた」ことに気づくという一節（*JS*, 400）が割り込んでいるのである――

> 「かくして，その匂いを感じると，ひとつの生の全体が立ち上ってくるのを私は感じたのだ，私の想像力が知らなかった生活，この瞬間に想像力が摘み取って味わいつつある生，それが私の感じている匂いのなかにあるのか，それとも私の記憶が提示する同じ匂いのなかにあるのか，私としてはむしろ２つに共通の本質のなかにあると信じたい〔…〕」
>
> « Aussi en la［= l'odeur］sentant ai-je senti toute une vie remonter, que mon imagination n'avait pas connue, qu'elle recueille en cet instant, la **goûtant**, je ne sais si c'est dans l'**odeur** que je sens, ou dans la même **odeur** que ma mémoire lui présente, plutôt j'aime à le croire［dans］l'essence commune aux deux［…］»

無意志的想起に関与する「匂い」の感覚が「部屋」に強く結びついてきたこと，そして，《マドレーヌ体験》の最初期の素描においてはそれが「お茶」に――お茶に浸される食べ物ではなく，飲み物の方に――引き寄せられていたことを，

まずは確認しておこう。

2. - «Proust 45», 1r°-2r°[29]

1908年秋に着手された「サント＝ブーヴに逆らって」の構想を綴ったテクストでは[30]，想起を引き起こすモチーフが「お茶」と「トースト・パン（pain grillé）」の組み合わせになる――

「このあいだの晩，雪ですっかり凍えて帰って来た私は，暖まることもできずに，自分の部屋で＜ランプのもと＞読書を始めていたところ，私の年老いた料理女が一杯のお茶を淹れてくれることを申し出たのだが，お茶はふだん私がけっしてとることのないものである。~~偶然によって~~　偶然によって~~彼女は何枚かトーストを作らせることを考えた~~ トーストしたパンを何枚かもってきた。~~そんなふうにして~~ ~~私は~~ トースト・パンをお茶のカップに浸させた，そして私がそのトーストを口に運んだ瞬間，~~私は感じた~~そして，それにお茶の~~匂い~~＜味＞が染み込んで~~柔らかくなる~~＜柔らかくなる ＞ 感覚が口蓋に~~触れ~~触れた瞬間，~~同じ~~ あるた~~だならぬ~~動揺を私は感じたのだが，それは~~一瞬揺らめく~~壁 薔薇，ジェラニウム，オレンジの樹の匂いのもたらす動揺であり，異様な光と幸福の感覚だった」

«L'autre soir, ~~ay~~［ant］étant rentré glacé, par la neige, et ne pouvant me réchauffer, comme je m'étais mis à lire dans ma chambre, <sous la lampe,> ma vieille cuisiinière me proposa de me faire une tasse de thé que je ne prends jamais. ~~Et~~ ~~le hasard fit qu'elle~~ le hasard fit qu'elle ~~eut l'idée de me faire griller quelques~~ m'apporta quelques tranches de pain grillé ; ~~et ainsi~~ ~~je~~ A~~u mom~~［ent］Je fis tremper le pain grillé dans la tasse de thé, et au moment où je mis le pain grillé dans ma bouche, ~~je sentis~~ et où j'eus la sensation de son ~~amollissement~~ <amollissement> pénétré d~~e l'~~**odeur** <'un **goût**> de thé ~~contre~~ contre mon palais ~~un même~~ je ressentis un trouble ~~extraord~~inaire［*sic*］, ~~des parois chancelants un instant~~ des **odeurs** de ~~roses~~ géraniums, d'orangers, une sensation d'extraordinaire lumière, de bonheur ;»（1r°）

まず，«odeur» の語が «goût» に書き換えられていることに注目してみよう。ひとたび現れて削除された「匂い」は，先に確認した「75枚の紙片」の一節と同じく「お茶」すなわち飲み物に結びついていたわけだが[31]，一方，この文の続きに「〔お茶に〕浸したトースト・パンの味にずっと心を集中しながら（m'attachant toujours à ce **goût** du pain grillé trempé）」（2r°）とあるとおり，匂いに代わった「味」の感覚は食べ物の方に重心をかけようとしていく。

この「感覚」はまた，「薔薇 ジェラニウム，オレンジの樹の匂い」がもたらすのと同じ「動揺」を感じさせるものでもあったことから，「お茶の味」と生命溢れる花木の「匂い」との密かなつながりを語り手に記憶させてもいる――コンブレーで春に「芳香を放っていた」花咲く菩提樹の記憶が浮上してくるのはしばし先になるが。

さて，興味深いことに，「お茶に浸されたトーストの味」によって想起された場面に現れるのは「お茶に浸されたビスコットの感覚」（2r°）である――

「そのとき，私は思い出した（je me rappelai）。＜毎日＞着替えて祖父の部屋に~~行く~~降りていくと，祖父は起きたところで，お茶をとっているのだった。祖父はそこにビスコットを一枚浸して私に食べさせてくれるのだった。そして，あのいくつもの夏（ces étés）が~~死んだ~~＜過ぎ去った＞とき，お茶のなかのビスコットの感覚（la sensation de la biscotte dans le thé）は，死んだ時間――知性＜にとっては死んでいたもの＞――が身を丸く縮めにやって来た避難所のひとつだったのだ。もし，その冬の晩（ce soir d'hiver），雪で凍えて帰ってきた私が~~一杯の~~ ~~求めなければ~~ ~~＜飲まなければ＞~~ ~~一枚のビスコットを一杯お茶のなかに~~ ~~＜なかに~~ ~~浸させなければ＞~~ ＜私の料理女が私に~~それを差し出さなければ~~ その飲み物を提案しなければ＞ 私はそれらの夏をおそらくは決して見いだすことはなかっただろう。私の知らない魔法の契約によって，その飲み物に復活（la résurrection）が結びついていたのだった」

« Alors je me rappelai : <tous les jours> quand j'étais habillé ~~j'allais~~[je] descendais dans la chambre de mon grand-père qui venait s'éveiller et prenait son thé. Il y trempait une biscotte et me donnait à la manger. Et quand ces étés ~~moururent~~ <furent passés>, ~~une~~ ~~les~~ la sensation de la biscotte dans le thé fut un des refuges où les heures mortes — ~~ce~~ ~~que~~ <mortes pour> l'intelligence — allèrent se blottir et où je ne les aurais sans doute jamais retrouvées, si ce soir d'hiver, rentré glacé par la neige <si[*sic*]> ~~je n'~~avais [*sic*] ~~demandé~~ ~~<bu>~~ ~~une tasse~~ ~~<fait tremper dans>~~ ~~une biscotte dans une tasse de thé~~ <ma cuisinière ne m'avait fait l'[*sic*] ~~offrir~~ <proposer ce brevage> ~~à laquelle~~ auquel la résurrection était liée en vertu d'un pacte magique que je ne savais pas.» （2r°）

続く文章を見ると，「ビスコット」の方が想起の契機としても選ばれたことが分かる。回想された場面に合わせて，回想する場面で「味わった」ものが「トースト」から「ビスコット」に置き換わっているからである――

「だが，私がビスコットを味わったとたんに，ひとつの庭が，小さなティーカップのなかに，花 ~~花壇~~ 花壇ごとに＜そのすべての花とともに＞~~輪郭を表した~~＜描きだされ

た>，まるで水のなかでしか姿を取り戻さないあの日本の小さな~~樹~~ 花のように」
«Mais aussitôt ~~q~~[*sic* : que] j'**eus goûté** à la biscotte, ce fut un jardin […] qui se ~~dessi~~[na] ~~dessi~~na[*sic*] <peinit> ~~par fleu~~[r] ~~plate bande~~ corbeille par corbeille <avec toutes ses fleurs dans la petite tasse de thé ~~comme~~ ~~ces~~ ces petit<e>s ~~arbres~~ fleurs japonaises qui ne se reprennent que dans l'eau.»（2r°）

ここに現れた水中花の比喩において，「日本の小さな樹」と綴られかけたのは，パリ万博で人気を博した盆栽のイメージが先にあったのか，あるいは「水のなかで」さまざまな形を成すもののうち樹木の姿に作家が関心を向けたということか。「原稿 IV」のように解凍するための湯の熱さの形容が消えているのは，水中花の比喩によって，液体のなかで固形物が「柔らかく崩れて」潤びることが描写の主眼になったためであろう。

また，想起という出来事は単純過去をベースに語られていて，「偶然に左右される」（1r°）非習慣的な事例となっている。一方，「復活（résurrection）」の対象となるのは「田舎家で過ごした~~幾年か~~幾つかの夏（«les ~~an~~[nées] étés que je passais dans la maison de campagne»；«ces étés»［1r°］）であり，「原稿 IV」と変わらない。

「お茶に浸したトースト」をめぐる夢想

このヴァージョンで消えてしまう «pain grillé» について，しばし立ちどまっておこう。

グリルしたパン，すなわちトーストは，英語 toast の意味とかつての風習を受け継いでいる。アベ・プレヴォによる『語彙辞典』の «toast» の項には，「食卓で健康を記念する乾杯」という定義とともに，「この語がフランス語で rôtie にあたるのは，イギリス人が炙ったパンをワインに入れて乾杯する慣習に由来する」と記されていた[32]。

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』の「省察 14 食卓の快楽について」の章には，「私がパンチを作っている間に，rôties（*toast*）が用意されたのだが，それはとても薄く，軽くバターを塗って，程よく塩味をつけたものだった」とあるほか，トーストパンが «thé» とともに供されるべきものであることも記されている。曰く，「食卓の歓び（le plaisir de la table）を最高度にもたらすため」の注意事項のひとつとして，「お茶は濃すぎないようにすべし。トースト rôties

は巧みにバターを塗り，パンチを入念に作るべし」[33]。

『19 世紀ラルース』の «toast» の項には，「乾杯」の意に加えて，「炙ったパン（pain rôti, toast）の一切れをグラス，カップ，盃のなかに入れて，食卓をひとめぐりさせ，会食者が口をつけた後，最初の人がそれを飲み干し，トーストを食べるというかつての風習」が記されている。『新ラルース図解百科』では，«toast» が «Rôtie. Tranche de pain grillé au feu et beurré» と説明されているほか，「ミルク，ワインやシードルに浸したり，鳥肉や魚肉のペーストを塗ったパン切れ」という表現で，飲み物に浸す場合と添える場合のトーストの供しかたが示されていた。また，アカデミーの辞書第八版は「トースト」を「炙ったパン片にバターを塗ったもので，お茶とともに供される」と記す[34]。

バター風味のパン切れをお茶に添えて，あるいはお茶に浸して食すことは，したがって，文化史を封じ込めた振る舞いとして，20 世紀初頭まで認識されてきたようである。このしきたりに官能性を纏わせる奇妙な逸話を，アレクサンドル・デュマが『料理大辞典』の「トースト」の項目に載せた解説から引いておこう――

「TOAST――トースト〔以下に述べられるような特殊な形での乾杯〕の慣習がフランスで根付いたのは大革命期である。この名称はイギリス人によるもので，誰かの健康を祝して乾杯する（porter la santé de…）際，各人のビール・ジョッキのなかに炙ったパン（rôtie de pain）を入れるのだが，それが *toast* と綴り，*toste* と発音されるものである。トースト（toast ou rôtie）は，ジョッキの最後を飲み干した人のものとなる。

ある日，イギリスで当時最高の美女と謳われたアン・ブーリンが取巻きの男たちに囲まれて湯浴みをしていると（身持ちの悪い女だったのである），紳士たちは彼女の機嫌を取ろうとして，各々グラスを取り，彼女の浴槽から湯を汲んで，飲んだのだ。ひとりだけ，後に続かない者がいたのだが，どうして同じことをしないのかと他の人々が尋ねたところ，その男はこう答えた――

《トーストをいただくつもりでおりますので》

イギリス人にしてはなかなか気の利いた言葉である。

これに継ぐ有名なトーストの例がもうひとつある。ステア伯爵がオランダのイギリス大使であったとき，すばらしい宴会をしばしば催して諸外国の大使を招待し，自らも外交上の宴に招かれていた。ある日，大使たちすべてがフランス大使の屋敷に集っていたときのこと，フランス大使がルイ 14 世の紋章の銘にちなんで，昇る太陽の健康を祝して乾杯した。皆がそれに返盃をした。女帝の大使は続けてドイツの諸公国をほのめかしながら，月と恒星に乾杯した。ステア伯爵が少なくともふたりの同僚に匹敵

するような乾杯の仕方をどんな風に行うだろうかと皆が考えていたところ，彼は重々しく立ち上がり，杯を掲げて言った：

《太陽と月と星を止めたヨシュアに》

悪くはないが，いささか勿体ぶり過ぎでは。いかがだろう。

最後にもうひとつ，小さなトーストについてのちょっとした一言を。イギリス人のとある晩餐で（こうしたことが見られるのはいつもイギリス人の宴なのだ），慣例どおり，ご婦人方の健康を祝して乾杯がなされたのだが，艶ごとで知られるＢ卿が言った：

《殿方諸君，私は両半球の美しき性に乾杯いたしますぞ》

――では私は，と一層リアリストのＶ侯爵が友に応じた，美しき性の両半球に乾杯いたしましょう」[35)]

艶めかしい女体に擬えられるものとしては «pain grillé» と同じ材質ではあっても女性名詞 «biscotte» の方が望ましいと，この逸話を踏まえてプルーストが考えたかどうかは不明だが，回想される場面のなかで，「お茶」の提供者として登場していた「祖父」（«Proust 45», 2r°）が消されてレオニー叔母に変わり（回想する場面では女中，母親），お茶に添えられる食物がマドレーヌに取って代わられる過程で女性性が強調されていったことは事実である。

また，トーストを浸した祝杯を挙げる際に引用された旧約聖書の一節――父祖アブラハムに神が与えることを約束したカナンの地に侵入する際，ヨシュアがイスラエルの民に完全な勝利を勝ち取らせるために太陽の動きを止めたという『ヨシュア記』第Ｘ章 12-13 節――に，プルースト読者は小説冒頭の「不眠の夜」の一文を重ね合わせずにはいられないだろう。「不眠で迎える朝方に，読書の途中，普段とは違う姿勢でふと眠り込んだときには，腕を上げるだけで太陽の動きを止め，後退させることができるし，目覚めの最初のひと時には，時刻が分からず，床についたばかりと考えてしまうかもしれない」（I, 5）という文章である。この喩えとともに「目覚めまでに流れた時間と目覚めたときの位置」の混乱を語った「不眠の夜」とマドレーヌ体験との関係については，別稿で考察を試みよう。

3. - Cahier 8, 46r°-48r° / 66v°-69r° (1909) [36)]

カイエ８では，46r° に続く紙葉が１枚分以上抜けた後に，「私」の想起体験が途中から語られる（47r°-48r°）。想起の感覚の中心になりつつあった「味」がここでは飲み物にも結びつけられている――

「レオニー叔母の，柔らかくなったビスコットの混じるお茶の味が認められたとたんに現れたのは，閉じ込められ，魔法にかけられていた過去であって，もしその日，私がお茶を頼もうという考えを持たなかったならば決して私の思考のなかで再会することがなかったであろう過去が解放され，甦っているのである」

«Et aussitôt <reconnu> ce **goût** du thé mêlé de biscotte amollie de ma tante Léonie, voilà ~~toute une part~~ que[*sic*] le passé qui y était enclos, ensorcelé et que je n'aurais peut-être jamais revu dans ma pensée si je n'avais pas en ce jour-là idée de demander du thé, qui ~~ressuscite~~ est délivré et qui ressuscite.» (47r°)

66v°-69r° に書き直された断章では[37]，想起する場面と想起される場面でそれぞれ契機となるモチーフが明記される――前者では「私がビスコットを浸したお茶の味（«la gorgée de thé mêlée de biscotte»；«une petite biscotte que j'y trempai»；«le **goût** de thé», 67r°）」，後者では「コンブレーで毎朝，私が味わったもの」である「柔らかくなったビスコットの混じるお茶の味（«ce **gôut** du thé mêlé de biscotte amollie», 68v°）で，飲み物と食べ物の組合せおよびそれがもたらす感覚の一致が初めて確認できるのである。

ところが，ひとたび収斂しかけた感覚を表す語は，直ちに微妙にずらされていく。想起する場面での «goût» を残したまま，想起された場面での «goût» を «saveur» に（ただし動詞 «gouter» を伴って）書き換える加筆修正が入るのだ。その書き直しの不手際が残る原文は次のとおりである――

«~~La~~<Ce> ~~cuillerée~~ **gôut** du thé mêlé de biscotte amollie c'est **celui** que la [68v°] // [69r°] cette **saveur**> [ページ冒頭，行の上に後から加筆] ~~que~~ tous les matins je **goûtais** à Combray, quand ~~à peine~~ <aussitôt> habillé, j'allais dire bonjour à ma tante Léonie qui me donnait une cuiller de son thé.»

想起する場面で感じる「味（goût）」と想起される場面での「風味（saveur）」。«saveur» すなわち味覚を前提とした匂いの感覚が表現されたのは，これまでのヴェルシオンに透かし見えていた「お茶の味」に潜む「匂い」の記憶が湧出したということか。まさにこの「匂い」こそが，マドレーヌ挿話の後半部（I, 50-51），レオニー叔母の部屋の回想における中心的な感覚になるだろう――

「お茶」のなかに開く花

カイエ 8, 69r° の水中花の比喩には作家の興味深い迷いが読み取れる――

> « comme ces petits[*sic*] ~~bonshommes japonais~~ <fleurs en papier japonais> dont on garde des années ~~des~~ des années dans des tiroirs la forme indistincte et qui dès qu'on les plonge dans un bol d'eau ou de thé, prennent leurs formes variées de fleurs, de barques, de personnages. »[38)]

後年この比喩について知人に確認しようとしたプルーストの言葉はそれを表したものだろう――

> 「日本の小さな遊戯をご存知でしょうか（あるいは中国の？　どこのでしょう？）小さな紙を水のなかに入れると，輪郭を描いて，小さな人の形などになったりするものです。それが何と呼ばれるものなのか，日本人に尋ねてみてくださいますか。とりわけ，お茶のなかで（dans du thé）そうすることがしばしばあるのかどうか，冷たい水か熱い湯のどちらでもいいのか，最も複雑な仕掛けでは，家や樹木や人物などもありうるのかどうか，ということを知りたいのです」[39)]

東洋のどこか，という揺らぎはタイプ原稿まで持ち越される――

> « Et comme dans ce jeu où les japonais se complaisent à tremper dans un bol de porcelaine coréenne rempli d'eau ou de leur infusion favorite, de petits morceaux de papier »（NAF 16730, f° 93 r° ; NAF 16733, f° 89 r° ; I, 1124）

決定稿では「韓国の」という形容詞はなくなり，鉢が満たされるのも « eau » であるのだが（I, 47），その修正はボドメル校正刷（1913 年 4 月 7 日付印刷）上のことになるだろう――

> « Et comme dans ce jeu où les Japonais se complaisent à tremper dans un bol de porcelaine ~~coréenne~~ rempli d'eau ~~ou de leur infusion favorire~~ de petits morceau de papier […] »（Bodmer [024], pl. 9 iii）

この小さな変化に目を留めるのは « thé » の訳し方に関わるからである。タイプ原稿では「韓国の陶器に紙細工を浸す日本人の遊び」について，「茶」という語が消え「彼ら日本人の好みの煎じ茶」となっているのだが，これは必ずしも「お茶」を排除するわけではない。実際，« infusion de thé » とも表現されるとおり（I, 46），« thé » は煎じ茶の一種類としての茶葉そのものも，それを煎じた飲み物のほうも指すのであって，少なくとも第二帝政下までの thé についてのデュマの次のような解説は，紅茶だけでなく日本の茶までを射程に入れ

ているのである――

「茶（thé）の種類は７，８種類あるが，我が国で消費されているのはほぼ３種のみ，ペリレ茶，スゥシオン茶，ペカオ茶であり，ペカオの匂いは最も香り高く心地よい（l'odeur est la plus aromatique et la plus agréable）」

「緑茶（thé vert）は，フランスでは稀にしか使われない。緑茶はいささか人を酔わせる特性があり，あまりに濃く過度の量を飲むと，神経に障る。茶は煎じて（par infusion）作る。適量の茶をティーポットに入れて，上から熱湯を茶碗半分ほど注ぎ，葉が開く（développer）のを待ってから，ティーポットを満たす」

「ティーポットに茶を入れるのは一家の女主人（la maîtresse de la maison）で，砂糖を入れ，仄かにクリームを加えたり（y ajout［er］un nuage de crème），レモンのスライス（une tranche de citron）やコニャックをひと滴加えたり，会食者に振るまうお茶の責任を負う」[40]

この記述は，スワンを「お茶でもてなす（prendre le thé）」オデットの仕草を思　わせるが[41]，日本，中国，中近東を一緒くたにした東洋趣味の部屋でイギリスかぶれのオデットが入れるお茶がどのような種類のものであったのかは想像するほかない。世紀末にかけては万博効果もあって日本の茶や茶器が話題になることもありえたろうが，オデット邸での茶法と今日の馴染み方から推して，既存の邦訳の多くが thé を「紅茶」としてきたのは尤もなことである。私たちとしては生成上の理由によって，すなわち，水中花の比喩のなかでひとたび現れた「日本人の好みの煎じ茶」が消え，緑茶への作家の関心が遠ざけられていくことをふまえて，少なくともマドレーヌ挿話における thé を「紅茶」と以下では訳していきたいと考える。

それにしても，水中花はそもそも「紅茶に浸したマドレーヌ」の比喩としてふさわしいのだろうか。というのも，この「日本人の遊び」を浸すものとして挙げられた「水（湯）もしくは紅茶」のうち，「紅茶」は最終的に落とされているからである。

実際，水中花の器に湛えられるべきものが，« thé » に代わって一度は現れて消えた « infusion » であったということは，そのなかで「ヴァリエーションのある形象（leurs formes variées）」[42] を開かせるための布石なのではなかろうか。作家の躊躇いは，葉のみから成る « thé » よりもこのイメージを確かに担いうる，なんらかの « infusion » の登場が近いことを私たちに予感させるのだ。

4. - Cahier 25, 2 r°-11 r° (1909) [43)]

想起はここでも「ビスコット」と「紅茶」の組み合わせによって誘い出されている――

「~~最近のある~~<最近の>ある冬のこと，~~凍えて~~ ~~凍って帰ってきたら~~<自分の凡庸さにうんざりした悲しい気持ちで家に帰ってくると〔…〕>普段は私がけっしてとることのなかった紅茶を少しばかり母が淹れてくれようとしたところ，私はすぐに読書を始めたので注意せずにいたのだが，紅茶と一緒に~~少しのパン~~ <何枚かのビスコット>が添えられていて，<そのうちの><一枚>を私は無意識の動作で（machinalement）取って紅茶に浸し，それが柔らかくなったところで口に~~運び~~ ~~<入れて>~~ ~~一口飲み込もうとしていた~~ 一口の紅茶と同時に入れた」

Il y avait bien des années que tout ce qui n'était pas cette heure, et ce théatre de mon coucher à Combray, n'existait plus moi［*sic*］<pour moi>, quand ~~un des derniers~~ un <des derniers> hivers, ~~étant rentré gelé~~ comme je rentrais ~~glacé~~ <triste ~~de~~ dégouté de ma médiocrité［…］> ma mère voulant me faire un peu de thé dont je ne prends jamais et apporta avec, sans que j'y fâsse attention, car je m'étais mis tout de suite à lire, ~~un peu de pain~~ <quelques> biscottes. Je <en> pris <une> machinalement la trempai // dans le thé et quand elle fut amollie la ~~mis~~ <~~portai~~> <mis> ~~dans ma~~ <~~à ma~~>［*sic*］bouche ~~en buvait une gorgée~~ <en> même temps <qu'>une gorgée de thé.»（5 r°-6 r°）

続く文章で現れる「味」の語は「ビスコット」に直結している――

«Je sentais <bien> qu'elle［= cette félicité］~~était~~ <devait être> liée au **goût** de la biscotte et que pourtant elle le dépassait infiniment ~~<entrée en moi>~~ <était entrée en moi au moment où la biscotte avait touché mon palais qu'elle devait être liée à ce **goût**, mais était d'une autre nature, elle le dépassait infiniment>.»（6 r°）

カイエ 8 では味覚の側に「紅茶」を引き寄せようとしていたのに対し，カイエ 25 ではそれが再び修正されるのだ――

「ビスコットの混じった紅茶の味（goût du thé mêlé de biscotte）」（C-8, 47 r°, 68 v°）
「紅茶に浸したビスコットの味（goût de la biscotte trempée dans le thé）」（C-25, 6 r°）

という微妙な言い回しの違いは，「味」の担い手が飲み物から食べ物へとあらためて移っていることを示すものだろう。

ところが，「思い出」が現れた途端，想起された場面の感覚と想起する場面の

感覚がともに «goût» から «saveur» 書き直されるのである。カイエ 8 では想起する場面の感覚は «goût» を維持していたことを考えると，まるで想起された場面の感覚に揃えるかのような動きである――

«Et tout d'un coup voici le souvenir qui est apparu, [*sic*] ~~ce plaisir~~ Ce<tte> **~~goût~~** <**saveur**> de biscotte trempée dans le thé c'est **~~celui~~**<**lle**> que ~~je~~ [*sic*] ~~ressent~~tais <**~~goût~~**~~[ais]~~> <**goûtais**> tous les matins à Combray, levé j'allais dire bonjour à ma tante Léonie.» (11 r°)

もっとも，«saveur» はここでも «goûter» の対象であり続けているし，この一節の次のヴァージョン «Proust 21» 14 r° および決定稿 I, 46 で «saveur» は «goût» に戻っているので，挿話前半部における「味」の優位は維持されることになるのだが，では «saveur» のなかに潜在する「匂い」の感覚のほうは忘れられてしまうのだろうか。

興味深いことに，«odeur» の語は，「紅茶の匂い（odeur du thé）」という表現で，同じ 1909 年の別カイエおよび手帳のなかのこの挿話に言及する執筆メモに見出されるのである――

Cahier 26[44], 12 v° en marge : (「印象」のもたらす「真実」について語る箇所で)
«~~bien~~ dire que dans ce cas ce n'est pas comme pour **l'odeur du thé** un souvenir que nous cherchons à faire monter en nous mais une vérité»

Agenda 1906[45], 55 v° : (ヴァイオリンの「楽節」から与えられる「無意識の想起（réminiscene）」と比して)
«Et à la fin m'en rappelant une [réminiscence], me disant : Que de temps perdu depuis Combray, je me les rappellerai toutes et m'en dirai le sens (et alors le complément de **l'odeur du thé** c'est que la vie est belle etc.)»

«Proust 45», 1 r° で «un goût de thé» と修正する前に «l'odeur de thé» とひとたびは書き記した記憶がまるで生き永らえていたかのように，«odeur» は飲み物に託され続けている。この感覚が主導権を発揮するのはマドレーヌ挿話の後半部，レオニー叔母の部屋の「菩提樹の煎じ茶」の文章（I, 50-51）である。そして，この全的に甦ったコンブレーの一情景における「匂い」の感覚と想起の関係は，挿話前半部でのマドレーヌの「味」と想起の関係とは異なるかたちで語られることになるのである。その点をここで確認しておこう。

菩提樹の煎じ茶──視覚的映像から匂いへ

マドレーヌ挿話の後半部（I, 50-51）は次のような文章に導かれて始まる──

「フランソワーズが叔母の紅茶（thé）を淹れるのだった。あるいはまた，気持ちの高ぶりを感じるときには代わりに叔母は煎じ茶の薬湯（tisane）を求めることもあり，そんな時，薬袋から菩提樹（tilleul）の分量を皿に振り出し，次いでそれを煮立ったお湯のなかに写すのを担当するのは私だった」（I, 50）

飲み物の選択肢を示しながら，それに続いて語られるのは「菩提樹の煎じ茶」のみの「姿（aspect）」である──

「茎の乾燥が，一種の気まぐれな生垣の組格子の形に茎を湾曲させていて（incurvées），その組み合わせ文様のなかに，色のさめた花々が開いていた（s'ouvraient）のはまるで画家が花々を配置し，最も装飾的になるよう花にポーズさせたかのようであった。葉はその相（aspect）を失い，あるいは変えてしまっていて，蝿の透明な羽やラベルの白い裏や薔薇の花びらなど，この上もなくちぐはぐな物の様子をしていたのであるが，それらは積み重ねられ，引き砕かれ，あるいは編み込まれて，ひとつの巣の作製に当てられているかのようだった。千もの小さな無用の細部──薬屋の魅力的な浪費と言おうか──は，自然にまかせたのではない人為的な加工の準備であったならば取り除かれていたであろうものなのだが，まるで一冊の本のなかで知り合いの人の名に出会って驚くときのように，それがまさしく本物の菩提樹，駅前の並木道で私が目にしていた（je voyais）あの菩提樹の茎であることを理解する喜びを私に与えてくれるのであった。その茎が姿を変えているのは，まさにそれが複製（doubles）ではなくそれ自体であったからであり，それが老いたからだった。それに，新しい特徴ひとつにしても古い特徴の変形（métamorphose）に外ならないのであって，小さな灰色の球のなかに私が認めるのは，時満ちるには至らなかった緑の蕾なのだった」（I, 50-51）

ここに認められるのは，カイエ 8, 69r° に遡る水中花のイメージ造型，「ヴァリエーションのある形象」であり，水中花の小片が «s'étirer», «se contourner», «se colorer», «se différencier» する姿（I, 47）は，菩提樹のさまざまな部位が «s'ouvrir», «la différence etre les parties de l'arbre qui avaient été "en couleur" et celles qui ne l'avaient pas été», «incurver»（I, 50-51）するさまに引き継がれていることが確認できよう。

注目したいのは，それがまさに視覚的映像である点だ。意志的記憶に関わる感覚として遠ざけられるべきものであるはずの視覚の働きは，乾燥した菩提樹の「相」が，かつての生気あふれる菩提樹の姿を「見ていた私」の記憶を蘇ら

せる想起体験の鍵になってさえいる。

しかもその想起の始まりにおいて，嗅覚は問題にされていない。「匂い」は想起を促す感覚ではなく，視覚的映像によって想起される感覚として，煎じ茶の描写の末部に現れるのである――

「とりわけ薔薇色の輝きは，月光のように穏やかで，壊れやすい茎の森のなかに花々を浮かび上がらせていて，そこで花はまるで小さな黄金の薔薇のように宙づりにされているのだったが――それはまるで消されたフレスコ画のあとを壁の上に今なお教えてくれる仄明かりのように，木のさまざまな部位の違い，「色が付いて」いたりそうでなかったりしていた部分の違いの徴であった――，そうした花びらは，薬袋を花盛りにする前には，春の宵々を芳香で満たしていた（avaient embaumé）ものであったことを，私に示しているのだった」(I, 51)

甦ってくるのは，季節違いのコンブレーの散歩で「私」が出会った感覚，「芳香を漂わせていた菩提樹の匂い（l'odeur des tilleuls qui embaumait）」(I, 113) であり，マドレーヌ挿話の後半は，全的に甦った「コンブレー II」(I, 47-184) のなかに視覚が嗅覚を呼ぶ回想の入れ子構造を設定していることになる。視覚に導かれた匂いの回想に続くのが，「やがてレオニー叔母は煮え立った煎じ茶の死んだ葉や萎びた花の味を風味として楽しみながら（elle savourait le goût），そこにプチット・マドレーヌを浸すこともあるのだった」という表現であり，匂いと味の共鳴がさらに重ねられるのである（I, 51）[46]。

実のところ，挿話前半の《マドレーヌ体験》においても視覚は排除されていたわけではない。「プチット・マドレーヌを見てはいたが，味わうまでは何も思い出さなかった（La vue de la petite madeleine ne m'avait rien appelé avant que j'y eusse goûté）」(I, 46) としながらも，無意志的記憶が呼び起こそうとするものは「イメージであり，視覚的な思い出（le souvenir visuel）であるはずだ」(I, 46) [47] と告げられていたからである。

マドレーヌにおける味覚から視覚への拡がりと菩提樹の煎じ茶における視覚から嗅覚への連鎖，2つの感覚の組み合わせを想起の発動の前後2つのパネルに配して，マドレーヌ挿話は成り立っているのである。

5. - «Proust 21»[48], 6r° à 14r°

「マドレーヌ」がこの自筆清書のなかに登場した際にも，問題になるのは「味」

である――

「私は~~感じていた~~ ~~知っていた~~ ＜感じていた＞，その力強い喜びが，~~紅茶で柔らかくなったマドレーヌ~~ 私が~~それを~~＜その＞一口を飲んだ飲み物〔囲み部分は削除〕＜紅茶とマドレーヌ＞の味に結びついているものだと，というのもそれが私の内に入ってきたのはその味と同時にであったからだ」

« Je ~~sentais~~ ~~savais~~ <sentais> qu'elle [= cette puissance félicité] était liée au **goût** de[u] ~~la madeleine amollie par le thé~~ brevage ~~dont~~ ~~que~~ <dont> j'avais bu une gorgée〔囲み部分は加筆後に削除〕<thé et du gâteau> ~~puis~~ <puis> que'elle était entrée en moi en même temps que lui […] » (10r°)

さて，「その味」によって想起されるレオニー叔母の部屋での体験のテクスト（14r°）は，加筆修正によってほぼ決定稿（I, 47）に近いかたちになっているのだが，両者の間でマドレーヌを浸す飲み物が変わっていることに注目しよう――

« Proust 21 », 14r° : « Et ~~aussitôt~~ <dès> que je ~~me fus rappelé que~~ eus reconnu le **goût** du morceau de madeleine trempé dans le thé que me donnait ~~tous les matins~~ <tous les matins> ma tante ~~Léonie,~~ »

I, 47 : « Et dès que j'eus reconnu le **goût** du morceau de madeleine trempé dans le tilleul que me donnait ma tante […] »

« Proust 21 » の「紅茶に浸されたマドレーヌの味」は，決定稿のマドレーヌ挿話の前半（I, 44-47）を締めくくる最後のパラグラフの冒頭文では「菩提樹に浸されたマドレーヌ」になっているのである。

また，決定稿 I, 46 の文章に相当する « Proust 21 », 14r° の別の一節において，回想されるレオニー叔母の部屋でとる飲み物として予告されているのが「紅茶」のみであったのに対して，決定稿ではそれに「菩提樹」が加えられて，「紅茶もしくは菩提樹の煎じ茶」となっている――

« Proust 21 », 14r° : « Ce **goût** c'était **celui** ~~de la petite~~ du petit morceau de madeleine ~~tre~~ que tous les matins à Combray, […] ma tante Léonie ~~me~~ ~~faisait~~ ~~retirer~~ ~~de~~ ~~sa tasse~~ ~~de~~ ~~thé~~ ~~pour me le donner~~ ~~<à manger>~~ <trempait dans son thé et me donnait ~~ensuite~~ ensuite.

I, 46 : « Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce **goût** c'était **celui** du petit morceau de madeleine que […] ma tante Léonie m'offrait après l'avoir trempé

dans son infusion de thé ou de tilleul.»

想起する場面での「紅茶」と想起される場面の「菩提樹の煎じ茶」[49] という飲み物の主役の交代を自然に見せるために，決定稿では，想起される予定の場面について「紅茶と菩提樹の煎じ茶」という両マチエールを包括する表現が採用されたのだろう。また，«Proust 21» には，決定稿（I, 46）と同じく，無意志的想起によって甦る世界を「匂いと風味（~~la s[aveur]~~ <'>-**odeur**-et-la-**saveur**）が支える回想の巨大な建造物」（14 r°）と呼ぶ文章が挿入されているが，それは，紅茶に浸したマドレーヌの「味」を現在と過去に共通する感覚として語ることが主調となった《マドレーヌ体験》のテクストのなかに，挿話の生成過程で潜在していた「匂い」の記憶を記しておくためではなかったか。「風味」の語は，嗅覚が味覚と分離することなくテクストに迎え入れられるように添えられた緩衝装置として機能しているのである。

6. - Placards Bodmer, pl. 9

マドレーヌ挿話の前半と後半に想起のモチーフを振り分けることで語りを展開していく試みは，ボドメル校正刷上の修正においても確認できる――

«Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce **goût** c'était **celui** du petit morceau de madeleine que […] ma tante Léonie m'offrait après l'avoir trempé dans son infusion ~~de thé ou~~ <[*marge*] <de> thé ou> de tilleul.»（Placards Bodmer, pl. 9 ii ; 1913 年 4 月 7 日付印刷）

想起される場面でレオニー叔母が差し出す飲み物として，「紅茶」を消し「菩提樹」だけを予告しようとした後，挿話前半との繋ぎを考えてであろう，「紅茶」を再び書き入れた文章が決定稿に引き継がれる（I, 46）。ただし，同内容を繰り返す文章では，挿話後半が「菩提樹」を中心にした記述となることをふまえてか，「紅茶」が消されて「菩提樹」のみが残される――

«dès que j'eus reconnu le **goût** du morceau de madeleine trempé dans ~~le thé~~ <[*marge*] [le] tilleul> que me donnait ma tante»（Placards Bodmer, pl. 9 ii）

この判断をそのまま決定稿に，しかも「紅茶」がマドレーヌの相手を務める挿話前半の締め括り，最終パラグラフ（I, 47）に活かすということは，挿話後半

での主要モチーフの交代を予告し,「菩提樹の煎じ茶」へと読者を誘う策であったのだろう。

«saveur».「味」と「匂い」の共鳴箱

マドレーヌ挿話前半部（I, 44-47）の先行テクストを通しての想起のモチーフと感覚との関係の変化をまとめてみよう。

飲み物に対して感じる「匂い」が「味」と書き換えられ（«Proust 45»），その「味」が食べ物の方により強く結びつきながら，飲み物の「匂い」の記憶に支えられてか「風味」の語が躊躇いがちに現れて（C-8），飲み物に浸された食物に対する「味」が「風味」に書き換えられる――ただし，saveur を動詞 goûter の対象にした例を頻出させて，味覚の領域を離れさせることなく（C-8, C-25）。マドレーヌの登場とともにその「味」に，挿話前半で問題にされるべき感覚は集中することになる（«Proust 21»）。

「匂い」を含みうるはずの語 saveur を goût から切り離さずに用いるための試行錯誤は，実際，生成過程の様々な段階で貫かれていた。「風味を味わう goûter la saveur」（C-8, 69r° ; C-25, 11r°）という表現は «Proust 21» でも見ることができる――

> «Proust 21», 11r° : «Puis une dernière fois je fais le vide devant lui [à mon esprit], je le mets en face du souvenir de cette **saveur** ~~du~~ <**goûté** dans le> thé mêlé de gâteau»

「味」と「風味」の交差はタイプ原稿上で修正されて，挿話前半からは消えてしまうが（«en face d~~u~~ <e> ~~souvenir de cette **saveur goîutée** dans le thé mêlé de gâteau~~ <la **saveur** encore récente de cette première gorgée>», NAF 16733, 86r°），『見出された時』で《マドレーヌ体験》を回想する表現 «quand je **goûtais** la **saveur** de la madeleine»（IV, 445）のなかに残される。また，挿話後半の先行テクストでは,「味を風味として楽しむ savourer le goût」（D16733, 93 bis r° へのP自筆挿入紙[50]）のかたちをとって，決定稿に至っている。«saveur» によって，マドレーヌ挿話の前半部は「匂い」の記憶を宿しながら「味」を語るテクストとなったのである。「同一 / 共通感覚」とみなされてきた感覚の実は複層的な相を担える語として «saveur» は有効だったのだろう。

「匂い」そのものの方はといえば，挿話後半部（I, 50-51）の「菩提樹の煎じ茶」の語りにおいて展開されることになるだろう。「紅茶に浸したマドレーヌの味」から「マドレーヌを浸す菩提樹の煎じ茶の匂い」へ――主題となる感覚をずらし，挿話の前半と後半に振り分けて語るのは，テクストの単純な反復を避けるための術，あるいは，想起する場面と想起された場面を素朴な鏡映関係から解放し，テクストの相互回収に代えて物語を増殖させていくためにプルーストが見出した方策とも言えようか。

読者が向き合っているのは，物語のなかで生きる「私」の体験への忠実さではなく，それを語る「私」の言葉の選択である。さらに，母宛の書簡（1888 年 9 月 5 日付）で，ロチを読む楽しみを「まるで紅茶（thé）を飲んだかのような満足感」に喩え，「お祖父さまは紅茶をすっかり絶って，橙花水（fleur d'oranger）にしました」と述べた報告で裏打ちすれば，「紅茶」を飲むのを「習慣に反する」行為にし（« Proust 45 »），紅茶と「祖父」の関係を消した（C-8）作家の判断は，『失われた時を求めて』がプルースト的体験からも遊離していく過程を垣間見せていることになる。小説の言葉はこの二重の生の次元からの離陸とともに誕生したのである。

結びにかえて――「風味」と「香り」，その後

« saveur » は小説の「第 1 篇・第 1 部を締め括る一節のなかで新たな定義を受ける――

> 「そんな風にして私はしばしば朝までコンブレーの時代を思って過ごすのだった，私の悲しい不眠の夜々を，また，もっと最近になって一杯の紅茶の風味（saveur）――コンブレーでは香り（フレーバー，parfum）と呼ばれたであろうもの――によって返ってきたかくも多くの日々を思いながら」（I, 183）

物を口に入れた時に感じる独特の味と香りを指す « parfum » は[51]，マドレーヌ挿話の鍵となる感覚を指す語として，続く文章でも繰り返されている（「最も古い思い出と，香り（parfum）から生まれたより新しい思い出」[I, 184]）。

想起する場面の「マドレーヌの味 goût」と想起される場面の「菩提樹の煎じ茶の匂い（odeur）」のずれを回収しうるこの saveur - parfum の言い換えが現れるのは，ボドメル校正刷の修正段階においてである――

« tant de jours dont ~~le souvenir~~ <'image> m'avait été plus récemment rendue par la **saveur** — ce qu'on aurait appelé à Combray le **parfum** — d'une tasse de thé » (Placards Bodmer, pl. 29 ii, pap.)
« [les souvenirs] les plus anciens, ceux <plus récents> nés d'un **parfum** » (Placards Bodmer, pl. 29 ii, pap.)

ここに引用した一節を含む「コンブレー」最後の「不眠の夜」(I, 183-184) は，タイプ原稿 NAF16730 上には存在せず，タイプ原稿 NAF16733, 265r° のページから挿入紙片（パプロール）に続けて自筆で書き込まれたものが，ボドメル校正刷（pl. 29 iv；1913 年 4 月 25 日付印刷）上で，余白の加筆を含めて全体を新たにパプロールに書き直され，加筆修正されたテクストである。遅い段階のこの加筆において，マドレーヌ挿話が発動させた無意志的記憶の効力に関わる不思議な文言に私たちは出会うことになるのだが，それについては稿を改めて考察することにしたい。

註

1）フランス国立図書館所蔵の「プルースト資料体」については慣例に倣い，本文および註記では下書きカイエと呼ばれるものの番号を「C-算用数字」，清書カイエは「C-ローマ数字」で表し，その他の形態の原稿については研究上の通称と NAF を記して，フォリオ番号を付す。加筆部分は < >，削除部分は抹消線で記載する。[ ] は著者による補足説明。また，プルーストの公刊テクストの引用は以下の各版に拠る—— Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1986-1989, 1994（以下，巻数と頁数のみ記す）; *Essais*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2022（*Essais* と略）; *Jean Santeuil*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971（*JS* と略記）; *Correspondance de Marcel Proust*, établie et annotée par Philip Kolb, 21 vol., Paris : Plon, 1970-1993（Corr. と略し，巻数と頁数を記す）。

2）Gérard Genette, « Métonymie chez Proust », *Figures III*, Paris : Éd. du Seuil, 1972, pp. 55-56.

3）件の論考でのジュネットの主旨は，そうした歓喜の原因が「同定される感覚」にあることに気づいた瞬間，「その瞬間には直ちに一連の付帯的感覚（sensations connextes）がまとい付く」のであって，そのなかで，共通する感覚の「類比」すなわち「隠喩的関連」が「換喩的関連」と「交差」するところに無意志的記憶が作動し，プルースト的「物語」が誕生する，という点にある。本稿で問題にするのは，ジュネットの言う「同一の感覚」とそれに絡まる「付帯的感覚」とのずれではなく，

「同一の感覚」と見做されてきたものそのものの名指しかたのずれである。

4）Marcel PROUST, *Les soixante-quinze feuillets et autres manuscrits inédits*, édition établie par Nathalie MAURIAC DYER, préface de Jean-Yves TADIÉ, Gallimard, 2021 (abrév. *75 feuillets*), p. 9. 1954 年に『サント＝ブーヴに逆らって』と題した未定稿を刊行した際，ファロワが「序文」のなかで言及して以来（voir Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve*, édition établie par Bernard de FALLOIS, Paris : Gallimard, 1954, « Préface »），その存在が 70 年近くも確認されずにきた「75 枚の紙片」を，校訂者ナタリー・モーリヤックは，その関連テクストと共に克明な註と解説を付して 2021 年に世に送り出したのである。

5）中野知律「菩提樹の記憶――『失われた時を求めて』における「復活」のモチーフ」，『ステラ』36 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2017 年 12 月，145–164 頁（『プルーストとの饗宴』水声社，2020 年，第 2 部・第 2 章に改編所収）および同書第 1 部・第 3 章「喋り出すマドレーヌ」。

6）« une sensation (goût de la madeleine trempée, …) qui était commune, à cet endroit où je me trouvais et aussi à un autre endroit (chambre de ma tante Léonie, …) … » (IV, 452) ; « la sensation commune avait cherché à recréer autour d'elle le lieu ancien, … » (IV, 453).

7）山本晃輔「嗅覚と自伝的記憶に関する研究の展望――想起過程の再考を中心として」，*Japanese Psychological Review*, 2015, vol. 58, n° 4, pp. 423-450.

8）Art. cité, p. 443

9）原田武『プルースト 感覚の織りなす世界』，青土社，2006 年。

10）『朝日新聞』2021 年 12 月 22 日朝刊記事。

11）« parfum » という語については後述。

12）マドレーヌ菓子が「味わう（goûter）」「食べる（manger）」の対象になった例も含めて挙げておくと：

II, 840 : « en goûtant à une madeleine »

III, 883 : « en goûtant la madeleine trempée dans la tasse de thé »

IV, 445 : « je goûtais la madeleine » ; « j'avais goûté d'une madeleine trempée dans une infusion » ; « en mangeant la madeleine »

IV, 446 : « le goût de la petite madeleine »

IV, 448 : « le goût de la madeleine »

IV, 450 : « le goût de la petite madeleine »

IV, 452 : « j'avais trempé la madeleine dans l'infusion chaude » ; « goût de la madeleine trempée »

IV, 456 : « le goût de la madeleine »

IV, 457 : « le goût de la madeleine » ; « il s'agît de réminiscences dans le genre […] du goût de la madeleine »

IV, 498 : « une sensation du même genre que le goût de la madeleine »

13）«*Swann* expiqué par Proust», *Le Temps*, 13 novembre 1913.『スワン家の方へ』は翌 14 日付でグラッセから刊行された。Voir *Essais*, 1171.

14）«Proust 45», 1r°-6r°. Cf. IV, 451-453 ; IV, 456-458.

15）『精選版 日本国語大辞典』（小学館）は「風味」の第一義として「味。飲食物が舌に与える趣きのあるあじわい」を挙げる。

16）Trésor de la langue française, «Saveur» : «A. Qualité qui est perçue par l'organe du goût. Syn. *goût* — par anal. Odeur, parfum».

17）*Encyclopédie*, 1751, articles «Saveur», «Odorat» et «Goût» :
Saveur（Physiolog.）Les sucs ou liqueurs des corps qui font impression sur l'organe du goût, est ce qu'on appelle saveur, & quelquefois l'on donne ce nom même à leur impression.
Odorat（Physiolog.）sens destiné par la nature pour recevoir & discerner les odeurs. L'odorat cependant paraoît moins un sens particulier qu'une partie ou un supplément de celui du goût, dont il est comme la sentinelle : c'est le goût des odeurs & l'avant-goût des saveurs.» «L'affinité qui se trouve entre les corps odoriférans & les corps savoureux, ou entre les objets du goût & de l'odorat. […] il se trouve une grande liaison entre les odeurs et les saveurs […] tant d'affinités entre les odeurs & le goût».
Goût（Physiolog.）: «la liaison particulière qui règne entre le goût & l'odorat» ; «le rapport immédiat & prochain que les odeurs & les saveurs ont ensemble».

18）Brillat-Savarin, *Physiologie du gout, ou Méditations de gastronomie transcendante*, 2 vol., Paris : A. Sautelet, 1826, t. 1, pp. 74-75.

19）吉田城『「失われた時を求めて」草稿研究』，平凡社，1993 年，75–95 頁。

20）2002 年に発見されたこの資料については，吉田城の論考「ボドメル博物館所蔵プルースト新資料にみる『スワン家の方へ』推敲過程」（*Études de Languee et Littérature françaises*, n° 85-86，日本フランス語フランス文学会，2005 年 3 月，273–291 頁）を参照。ただしマドレーヌ挿話についての考察は含まれていない。

21）*75 feuillets*, p. 18. 実際には 43 枚の二つ折紙片（86 紙葉，176 頁）。*Ibid.*, p. 16 et p. 199.

22）*Ibid.*, pp. 128-129.

23）*75 feuillets*, pp. 249-252.

24）吉田城は，Carnet 1, 10v° のメモが，1908 年に刊行されたラスキンの『サン＝マルコ洗礼堂の憩い』の仏誤訳をプルーストが参考にした可能性を指摘する――「プルーストが段違いの敷石の主題を，自分の体験ではなく，書物につけられた写真版から着想したらしいことが分かる」（吉田前掲書，414 頁）。Voir John Ruskin, *Le Repos de Saint-Marc. Histoire de Venise pour les rares voyagers qui se soucient encore de ses monuments*. Traduit de l'anglais par Mlle K. Johnston, Paris : Hachette, 1908. Voir aussi *Cahier Marcel Proust* 3, «Textes retrouvés recueillis et pré-

senté par Philip KOLB », Paris : Gallimard, 1971, pp. 233-234. また，Carnet 1, 6r°（1908 年 7 – 8 月）にはヴェネチアの印象とカブールの印象が重ね合わせられているが，無意志的想起とみることは難しい。

25）*75 feuillets*, pp. 103-109 ; « Venise »［タイトルは校訂者による］，83r°-83v°.

26）決定稿で《マドレーヌ体験》に先立って語られことになる「ケルトの信仰（la croyance celtique）」（I, 43-44）は，この断章では「ブルターニュの伝説（une légence bretonne / une de ces légende comme il y en a tant en Bretagne）」として紹介されている。« Proust 45 » では「ブルターニュ」の固有名は消えて「ある種の民間伝承（certaines légendes populaires）」（1r°）と語られ，カイエ 8 で「ブルターニュ伝説（une légende bretonne）」（6r°, 67r°）に戻る。カイエ 25 では，死者の魂にまつわる「信仰」の由来について「ブルターニュ」を修正した「ケルト」がさらに削除されるが（4r°），« Proust 21 », 8r° に至って「ケルトの信仰（la croyance celtique）」が定着することになる。

27）Lettre à Louis de Robert（juillet 1913），*Corr*. XII, 232 : « Aimeriez-vous comme titre : *Jardins dans une tasse de thé*, ou l'*Âge des noms* pour le premier. »

28）*JS*, 397-402 : «［Souvenirs de la mer devent le lac de Genève］». 吉田城前掲書，80 頁および註も参照のこと。

29）NAF16636. «［Projet de préface］», *Essais*, 695-697 ; « Autre manuscrit n° VII », *75 feuillets*, pp. 136-138.

30）執筆時期については，ナタリー・モーリヤックは 1908 年 10 月もしくは 11 月とし（*75 feuillets*, p. 235），吉川一義はカルネ 1, 17v° との照合により 1908 年 12 月頃（筑摩書房版『プルースト全集』，第 14 巻，473 頁参照），吉田城は 1909 年初めとする（前掲書，81 頁参照）。

31）ナタリー・モーリヤックもここでの « odeur » の語の現れを指摘するが，感覚とマチエールの関係は考慮されていない（voir *75 feuillets*, p. 272）。

32）Antoine-François PRÉVOST, *Manuel lexique ou Dictionnaire portatif des mots françois : dont la signification n'est pas familière à tout le monde*. Ouvrage fort utile à ceux qui ne sont pas versés dans les langues anciennes et modernes, et dans toutes les connaissances qui s'acquièrent par l'étude et le travail. Pour donner aux Mots leur sens juste et exact, dans la lecture, dans le langage et dans le style, Paris : Didot, 1750, p. 741. « rotie » については，*TLFi* は « Tranche de pain grillée » の意での初出を 13 世紀前半のトルヴェールの詩（Guillaume LE VINIER, *Poésies*, Genève : Droz, XXXIX, 2）に見ている。

33）BRILLAT-SAVARIN, *Physiologie du goût*, t. I, p. 353, « Méditation XIV » : « Je fis donc le punch ; et pendant que j'y étais occupé, on exécutait des rôties（*toasts*）bien minces, délicatement beurrées et salées à point » ; p. 345 : « Que le thé ne soit pas trop chargé ; que les rôties soient artistement beurrées, et le punch fait avec soin ».

34）*Dictionnaire de l'Académie française*, 8e édition, 1932-1935 : « Toast : Mot emprunté de l'anglais. Proposition de boire à la santé de quelqu'un, à l'accompagnement d'un vu, etc. Porter un toast. Il designe aussi une Tranche de pain rôti et beurré qui se sert avec le thé. »

35）Alexandre DUMAS, *Grand dictionnaire de cuisine*, 1873, pp. 1029-1030.

36）和田章男によれば，カイエ 8 の執筆時期は 1909 年 6 月頃。Voir Akio WADA, *La création romanesque de Proust : la genèse de « Combray »*, Paris : Honoré Champon, 2012, p. 175.

37）*RTP*, I, 695 : « Esquisse XIII » ; note, I, 1440.

38）*Cf.* C-8, 48 r° : « comme ces petits papiers japonais qui restent ces années informes et méconnaissables dans un tiroir mais qui plongés dans un bol d'eau, reprennent en un instant leur forme insoupçonnable de clochers, de fermes, […] ».

39）Lettre à René Ginpel（juillet ou août 1911）, *Corr.* X, 321. 1904 年にマリー・ノードリンガーから送られた水中花についての記述（Lettre à Marie-Nordlonger［17 ou 24 avril 1904］, *Corr.* IV, 111）も参照。

40）Alexandre DUMAS, *Grand dictionnaire de cuisine*, 1873, pp. 1026-1028 : « Thé ».

41）« Odette fit à Swann son "thé", lui demanda : "Citron ou crème ?" et comme il répondit "crème", lui dit en riant : "Un nuage !" »（I, 218）.

42）決定稿ではさまざまな形象が列挙されているので varié の語は不要とみなされたか（I, 47）。

43）和田章男によれば 1909 年 10 月の執筆（voir WADA, *op. cit.*, p. 118）。

44）執筆時期は 1909 年 6 月（voir WADA, p. 175 ; I, 1465）。

45）Marcel PROUST, *Agenda 1906*, édition présentée et notée par Nathalie MAURIAC DYER, Françoise LERICHE, Pyra WISE et al., Éditions de la Bibliothèque nationale de France, Publication sur OpenEdition Books, 26 octobre 2015（EAN électronique : 9782717726947）［URL : http://www.openedition.org/6540］. メモは 1909 年の春の終わりもしくは夏頃のもの .

46）D16733, 93 bis r°（挿入紙上のプルーストの自筆加筆）；D16730, 97 r°. 註 50 参照。

47）NAF16752, 151 r°, en marge : « Certes ce qui palpite au fond de moi c'est la force le lieu, le souvenir des yeux qui est liée à cette saveur qui tente de la suivre jusqu'à ~~la~~ <~~claire~~> ~~surface~~ ~~claire~~ ~~de~~ ~~et à la~~ ~~limière de ma conscience~~ <moi>. » *Cf.* NAF16752, 152 r°, pap. : « Certes ce qui palpite <ainsi> au fond de moi c'est la forme le lieu, la chose autroifois vue qui est liée à cett légère saveur qui tente de la suivre jusqu'à la <claire> surface de ma conscience. »

48）NAF 16703. I, 697-702, « Esquisse XIV » には簡略化された転写が再録されている；*cf.* I, 1440. マドレーヌ挿話の自筆清書は 1909 年 11 月末（voir WADA, *op. cit.*, p. 34）。

49）「菩提樹の煎じ茶」がマドレーヌ挿話後半部のタイプ原稿の修正段階に登場する状況については，前掲拙論『「菩提樹の記憶――『失われた時を求めて』における「復活」

のモチーフ」，145–164 頁，および前掲拙著『プルーストとの饗宴』第 2 部・第 2 章を参照。

50）D16730, 97 r° には他者の手になる加筆がある。

51）*TLFi* : « Substance aromatique agréable au goût que l'on incorpore aux boissons, aux mets, aux desserts ; p. méton. le goût lui-même ».